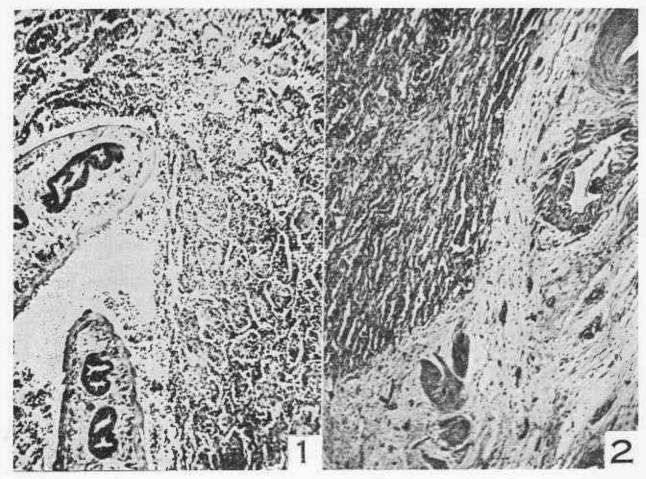
日生称为了

第 9 巻 昭和 38 年 1 月 第 1 号



寄生性気管支拡張症

宮崎大学農学部獣医学科出題•第2回獣医病理学研修会標本 No. 26, No. 27 A, B

牛においては肝蛭 (Fasciola sp.) が肺に異所寄生し て気管支拡張症を起すことがある。このことに関しては 本邦で古く田熊氏の報告(中央獣医学誌, 1926) がある が、著者は先年神戸と畜場で2万5千余頭の牛について 調査した結果,全と殺牛の1.97%に本症病変を検出した. 胸腔経由或は血管経由で肺に侵入した肝蛭は先ず肺組織 内を遊走するが、図1) はその所見を示す。即ち、虫体 の組織破壊に伴なつて起る出血・ヘモジデリン沈著・好 酸球の浸潤集簇等が見られるが、好酸球集簇巣のうち、 やや経時性のものは周囲に Fibroblasten の増殖を起し いわゆる好酸球性膿瘍を形成する。虫体からやや離れた 肺胞内には粘液の貯留が著るしく、且つ、その内に好酸 球・大単核円形細胞等を含有する。小さい気管支枝のう ち病変の比較的激しいものでは、粘膜上皮は一部剝脱し : 管腔内に多量の変性好酸球等を充満,管壁には好酸球・ リンパ球・プラズマ細胞等の浸潤を呈し、且つ、リンパ 沪胞の腫大を認める。これを要するに肺胞及び小気管支 枝においてはカタル性炎の像が明かである。

次に、肺組織内を遊走する肝蛭が偶々気管支腔内に侵

入すると、虫体による慢性刺激によつて管腔の拡張を招 来する。この際、原発の拡張病巣(第1次気管支拡張部 と命名。その大さは拳大以上に達するものあり) はその 末梢にある小さい気管支枝に病変を波及して、多くの第 2次気管支拡張部を形成する。この場合,拡張した気管支 枝の管壁には著明な結合織の増殖が起り、それが更に小 葉間質に波及して間質結合織の顕著な境厚を来たす。病 的気管支枝の外囲に位置する肺胞は拡張気管支枝のため 圧扁され、また、増厚した間質結合織の圧迫を受けて著 しく狭小となり無気肺の状態に陥る(2図)。なお、これ ら結合織増生部には細胞浸潤の著明なところがある。狭 小型の肺胞と共に、1)図で見たようなカタル性炎像の著 しい小気管支枝や肺胞も認められるが、これらにおいて はその腔内容物の一部が既に器質化を起し始めている。 勿論、狭小と内容物充塡の双方の病像を併有する肺胞も 少なくない。

一般に病変部とその外周に位置する健常部とは、小葉間質を境として明瞭な区分を示すのが常である。